

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	中学生の剣道に対する意識について
Author(s)	星, 秀男 / 松本, 延見子 / 野田, 洋平 / 櫻村, いずみ / 吉沼, 充
Citation	茨城大学教育学部教育研究所紀要(22): 195-202
Issue Date	1990-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/11309">http://hdl.handle.net/10109/11309</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

## 中学生の剣道に対する意識について

星 秀男\* 松本延見子\* 野田 洋平\*\*  
檜村いずみ\*\*\* 吉沼 充\*\*\*

### はじめに

剣道は、竹刀をとおして相手との攻防を競う競技である。したがって、直接相手と組み合う他の武道などに比べて、竹刀操作が運動技能の中心に据えられ、老若男女の区別なくできる運動でもある。さらに、「礼に始まり礼に終わる」ことや打突の有効性として「気・剣・体の一致」が要求されるなど、自己や友人への人間性の尊重といった精神的な求道性が要求される運動でもある。また、剣道の授業で味わう満足感や充実感は、自分の技が決まったり相手への打突が成功した時に感じられる。すなわち、格闘技としての特性をふまえて運動の喜びを味わうことができる。

新指導要領(1989)ではそれまでの「格技」から「武道」になり、男女共修ができることが、注目すべき点としてうちだされた。我が国固有の文化としての武道の特性をふまえた行動の仕方が重視されるようになったことも大きな特徴としてあげられる。すなわち、武道のもつ歴史や文化が、他のスポーツでは得られない教育的効果をあげるものとして、今まで以上に期待されたものとしてとらえることができる。

角(1987)は、剣道の特性を、文化的、教育・体育的、技術的な側面から述べている。そして、文化的特性を、「剣道のもつ広範・深奥な特徴のなかから、学校体育の目標達成に深い係わりのあるものを浮き出させることが必要である」とし、「礼儀を重んじること」「競争(闘争)と協同の精神の一体化がはかれること」「技能が無限の可能性をもつこと」の3点からとらえている。また、鈴木(1988)は、「修行-教材即修練の教育観」「境地-無に表わされる人間統合の世界と心身一如の体得」「礼-形から心へ自己信頼に基づく人間関係の形成」の3点をとりあげ、文化的特性と教育的特性の関連に視点を置いている。

このようにさまざまな特性を持つ剣道が、教材として取り上げられ教育的な効果をあげるためには、それを受入れる側の生徒が、剣道という授業をどのようにとらえ、どのような診断を下しているのかを把握しなければならない。

附属中学校では、昭和62年度から3年間にわたって、「自己啓発をする生徒の育成」を目指して研究をしてきた。そして、体育の授業においては、「さらに高度な技に挑戦しようという意欲が高まる」「自ら積極的に取り組もうとする主体性が高まる」「協力や支え合いなどの人間関係が広がる」ことが自己啓発をする生徒の姿であるとしてとらえた。その研究の結果から、望ましい体育の授業は、「運動の喜びを味わわせること」「主体的に授業に取り組ませること」「授業に取り組む意欲を育てること」「人間関係を円滑にすること」の4つの視点から迫る必要があると考えた。生徒が生き生きと活動するため

\* 茨城大学教育学部附属中学校 \*\*茨城大学教育学部

\*\*\* 茨城大学大学院教育学研究科保健体育専修

に大切なことは、運動の特性に触れさせること、生徒の主体的な活動を確保しその取り組みに積極性を持たせること、そしてそのような活動は円滑な人間関係によって支えられるものと考えたからである。そして、その4つの視点から剣道の授業診断を行うことにした。

剣道の授業に関する研究は恵土(1989)の正課剣道の指導事例や、田島(1989)の正課剣道における意識の変化について述べたものなど数多くあるが、剣道の授業を生徒の態度面からみた事例は少ない。さらに、小林(1978)の態度測定法を用いて体育の授業分析を行った研究はあるが(菊地・野田・梅野・後藤・辻野ら(1987)の事例的研究、米田ら(1986)の授業研究など)剣道の授業について、態度測定をこころみた事例はまだない。

そこで本研究では、小林の態度測定による授業診断の30項目を用いて、剣道の授業を診断するとともに、自己啓発に関する4つの視点に該当する項目を選び出し、その項目のクロス集計をすることによって、生徒が剣道の授業に対してどのような印象を持ち、どのような反応を示すかをとらえることにした。

#### 研究内容及び方法

- |   |      |  |
|---|------|--|
| 1 | 対 象  | 茨城大学教育学部附属中学校生徒<br>1年男子 86名                      2年男子 86名                      計 172名  |
| 2 | 調査期日 | 平成元年2月   |
| 3 | 内 容  | ○小林の態度診断法 以下の30項目による<br>(運動のよろこびを測る項目 10項目)<br>(授業内容に対する評価項目 10項目)<br>(授業に対する価値を測る項目 10項目)<br>○上記の30項目の中から、以下の項目を選択しクロス集計した<br>・「運動の喜び」に関する項目 3項目<br>Q-18    Q-23    Q-4<br>・「主体的な取り組み」に関する項目 3項目<br>Q-8     Q-14    Q-26<br>・「意欲的な取り組み」に関する項目 3項目<br>Q-7     Q-15    Q-22<br>・「円滑な友人関係」に関する項目 4項目<br>Q-6     Q-16    Q-21    Q-25 |
| 4 | 方 法  | 質問紙によるアンケート調査<br>単純集計            カイ自乗検定をおこなう<br>クロス集計<br>態度スコア   |

表1 昭和63年度 態度尺度表(剣道)——単純集計

[中1男子 剣道 サンプル数 86 中2男子 剣道 サンプル数 86]

[ C-1 いいえ C-2 どちらともいえない C-3 はい ]

番号 (Q)	質 問 項 目	中1 男子			中2 男子		
		C-1 %	C-2 %	C-3 %	C-1 %	C-2 %	C-3 %
Q 1	剣道の後は、快い興奮が残る	9.3	25.6	65.1	9.3	32.6	58.1
Q 2	剣道の授業は、心や身体の緊張をほぐしてくれる	14.0	29.0	57.0	10.5	31.4	58.1
Q 3	剣道の授業は、生活にうるおいを与えてくれる	19.8	50.0	30.2	22.1	51.2	26.7
Q 4	剣道の授業では、私は喜びより苦しみが多い	68.6	25.6	5.8	53.5	34.9	11.6
Q 5	剣道の授業で、いろいろな人といっしょに活動することが私はとても楽しい	3.5	19.8	76.7	2.3	23.3	74.4
Q 6	剣道の授業は、友達を作る場として、高く評価することができる	8.1	50.0	41.9	14.0	48.8	37.2
Q 7	剣道の授業は、自分から積極的に汗を流し、身体を鍛えようという意欲を起こさせる	2.4	30.2	67.4	5.8	25.6	68.6
Q 8	剣道の授業では、われわれが自主的に活動することができる	9.3	36.0	54.7	4.7	37.2	58.1
Q 9	剣道は教科の中で、最も価値あるものの一つだ	12.8	40.7	46.5	11.8	47.7	40.7
Q10	剣道の授業時間は少なすぎる	4.7	34.9	60.4	15.1	30.2	54.7
Q11	剣道の授業は、キビキビした動きのできる身体を作る	7.0	24.4	68.6	8.1	22.1	69.8
Q12	剣道の授業は、体力作りに役立つ	5.8	20.9	73.3	11.6	18.3	72.1
Q13	剣道の授業で、明朗活潑な性格をつくることができる	10.5	46.5	43.0	12.8	45.3	41.9
Q14	剣道の授業は、たくましい精神力を養成する	4.7	22.0	73.3	5.8	17.4	76.8
Q15	剣道の授業は、どんなときにも正々堂々とがんばる習慣を身につけさせてくれる	10.5	25.5	64.0	4.7	23.3	72.1
Q16	剣道の授業は、お互いに助け合い、協力しあう習慣を身につけさせてくれる	10.5	33.7	55.8	12.8	39.5	47.7
Q17	剣道の授業では、運動のやり方だけでなく、その基本となる理論を学ぶことができる	16.3	46.5	37.2	14.0	48.8	37.2
Q18	剣道の授業で、私はときどき深い感動を感じる	26.7	47.7	25.6	25.6	41.9	32.5
Q19	剣道の授業は、中途半端でまとまりがない	69.8	23.2	7.0	58.1	33.7	8.2
Q20	剣道の授業は、その場かぎりのもので、長く印象に残るという様事はない	59.3	31.4	9.3	50.0	41.9	8.1
Q21	剣道の授業で、チームワークやチームプレイの発展を期待するのは無理だ	38.4	33.7	27.9	29.1	40.7	30.2
Q22	剣道の授業は、心や身体の緊張をほぐしてくれる	57.0	31.4	11.6	59.3	31.4	9.3
Q23	剣道の授業で、剣道をする喜びを味わうことができるのは一部の人にすぎない	59.3	34.9	5.8	60.5	32.5	7.0
Q24	剣道の授業では、人間の利己主義がむきだしになる	48.8	39.6	11.6	55.8	33.7	10.5
Q25	剣道の授業の時の仲間は、その場かぎりの仲間にはすぎない	75.5	19.8	4.7	65.1	29.1	5.8
Q26	剣道の授業は、何も考えずに命令に従う人間を作りやすい	75.6	18.6	5.8	79.1	16.3	4.6
Q27	剣道の授業は、理論と実践がかけはなれている	58.1	29.1	12.8	50.0	38.4	11.6
Q28	剣道の授業は、何をねらっているのかわからない	81.4	9.3	9.3	66.3	25.6	8.1
Q29	剣道の授業では、他の科目と比べて先生の存在価値は低い	66.2	19.8	14.0	65.1	32.6	2.3
Q30	課外で自由にスポーツができる条件があれば、剣道は科目としてなくてもよい	62.8	25.6	11.6	47.7	33.7	18.6

表2 態度スコア-授業診断表

診 断 表							
昭和63年度 3学期 教材 剣道							
調査人数		1年男子 86名 2年男子 86名 計 172名		項目点			
				1年男子		2年男子	
Q 番号	質問項目			0-x	$\frac{0-x}{n}$	0-x	$\frac{0-x}{n}$
よ ろ こ び	Q 1	こころよい興奮		48	0.56	42	0.49
	Q 2	心身の緊張をほぐす		37	0.43	41	0.48
	Q 3	生活のうるおい		9	0.10	4	0.05
	Q 4	苦しみより喜び		54	0.63	38	0.42
	Q 5	集団活動の喜び		63	0.73	62	0.72
	Q 6	友達を作る場		28	0.34	20	0.23
	Q 7	積極的活動意欲		56	0.65	54	0.63
	Q 8	自主的思考と活動		39	0.45	46	0.53
	Q 9	体育科目の価値		28	0.34	25	0.29
	Q 10	授業時間数		48	0.56	34	0.40
態 度 ス コ ア				4.79		4.24	
評 価	Q 11	キビキビした動き		53	0.62	53	0.62
	Q 12	体力作り		58	0.67	52	0.60
	Q 13	明朗活発な性格		28	0.33	25	0.29
	Q 14	精神力の養成		59	0.69	61	0.71
	Q 15	堂々頑張る習慣		46	0.53	58	0.67
	Q 16	協力の習慣		39	0.45	30	0.35
	Q 17	基本的理論の学習		18	0.21	20	0.23
	Q 18	深い感動		-1	-0.01	6	0.07
	Q 19	授業のまとめり		54	0.63	43	0.50
	Q 20	授業の印象		43	0.50	36	0.42
態 度 ス コ ア				4.28		4.46	
価 値	Q 21	チームワークの発展		9	0.10	-1	-0.01
	Q 22	みんなの活動		39	0.45	43	0.50
	Q 23	みんなの喜び		46	0.53	46	0.53
	Q 24	利己主義の抑制		24	0.28	39	0.45
	Q 25	永続的な仲間		61	0.71	51	0.59
	Q 26	主体的人間の育成		60	0.70	64	0.74
	Q 27	理論と実践の統一		39	0.45	33	0.38
	Q 28	授業のねらい		62	0.72	50	0.58
	Q 29	教師の存在価値		45	0.52	54	0.63
	Q 30	体育科目の必要性		44	0.51	25	0.29
態 度 ス コ ア				4.97		4.68	

図1 クロス集計の結果

図1-1 運動のよろこび (Q18-Q23) 1年

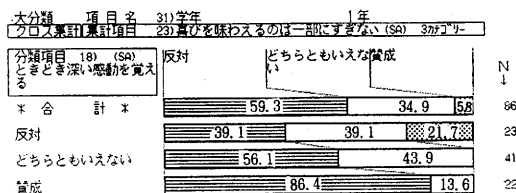


図1-2 運動のよろこび (Q18-Q23) 2年

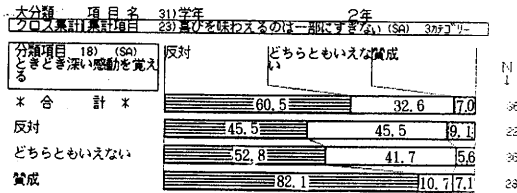


図1-3 運動のよろこび (Q18-Q4) 1年

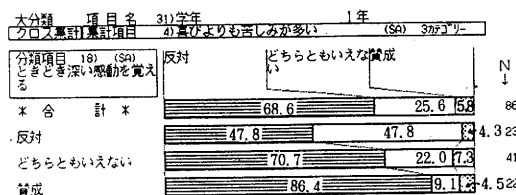


図1-4 運動のよろこび (Q18-Q4) 2年

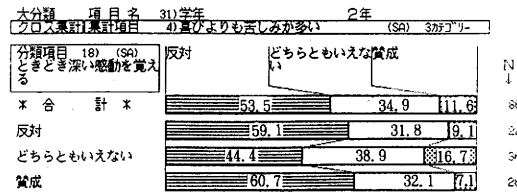


図1-5 主体的な取り組み (Q8-Q14) 1年

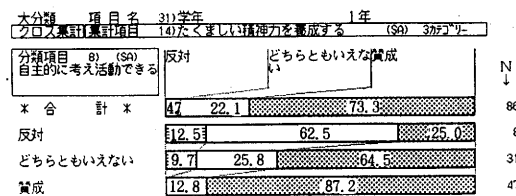


図1-6 主体的な取り組み (Q8-Q14) 2年

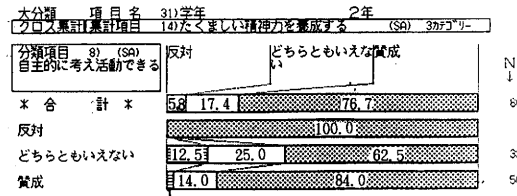


図1-7 主体的な取り組み (Q8-Q26) 1年

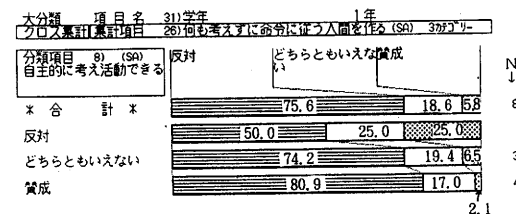


図1-8 主体的な取り組み (Q8-Q26) 2年

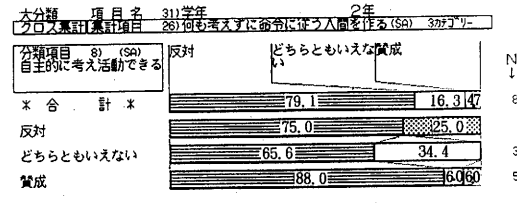


図1-9 意欲的な取り組み(Q 7-Q15) 1年

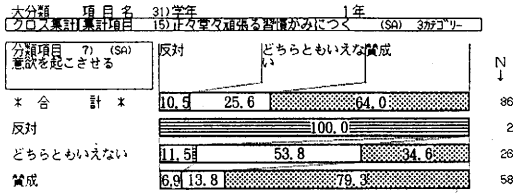


図1-10 意欲的な取り組み(Q 7- Q15) 2年

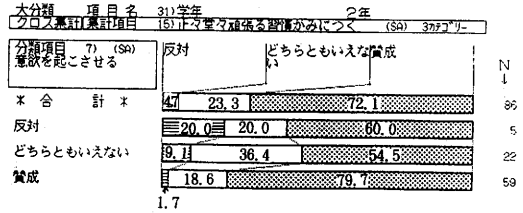


図1-11 意欲的な取り組み(Q 7-Q22) 1年

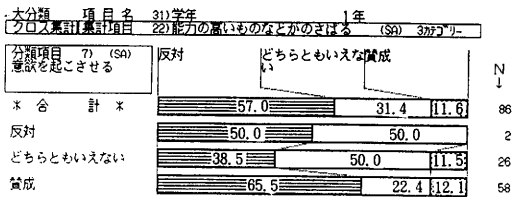


図1-12 意欲的な取り組み(Q 7- Q22) 2年

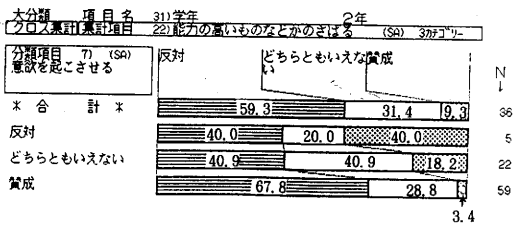


図1-13 友人関係(Q 6-Q16) 1年

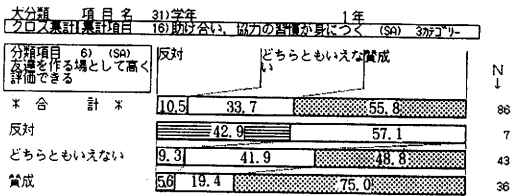


図1-14 友人関係(Q 6- Q16) 2年

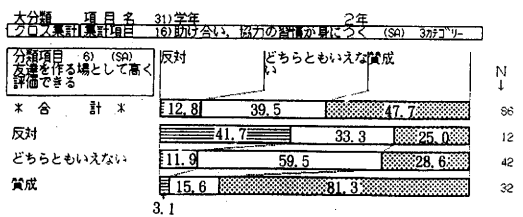


図1-15 友人関係(Q 6-Q21) 1年

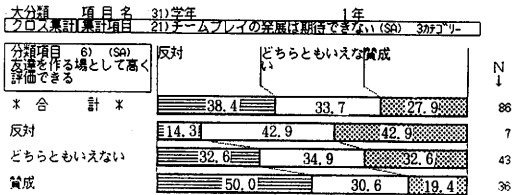


図1-16 友人関係(Q 6- Q21) 2年

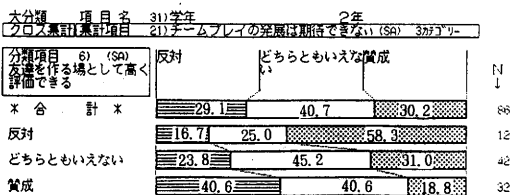


図1-17 友人関係(Q 6-Q25) 1年

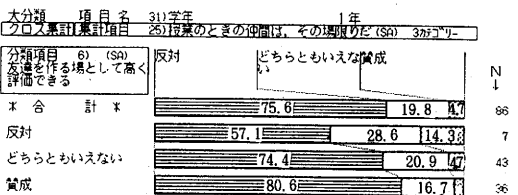
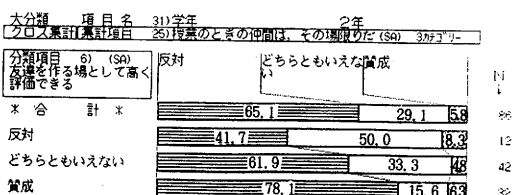


図1-18 友人関係(Q 6- Q25) 2年



## 結果と考察

表1の態度尺度表について、カイ自乗検定を行った結果、Q28とQ29の2項目に有意差が見られた。剣道の授業に関して、Q28とQ29の項目については1年生と2年生の意識が異なるが、他はほとんど同じ傾向を示していることになる。鈴木(1989)は、剣道学習においては初歩の段階から剣道の醍醐味を味わうことができるとしており、そこに剣道教材の価値と特色を認めている。したがって、剣道の授業の場合、好意的・非好意的な態度についてはほとんど学年差は関係がないといえる。

表2の授業の診断表について、「授業のよろこび」の態度スコアを見ると、2年生に比べて1年生のほうが高いスコアを示している。Q5の「集団活動の喜び」、Q7「積極的活動意欲」の項目点については、1、2年生共に高い数値を示している。これは、対人的な技の練習という学習形態によって、仲間と活動する楽しさを味わうことができると考えられる。また、集団活動の喜びが高まることは、同時に活動の意欲が高まることであると推察される。

「授業に対する評価」の態度スコアを見ると、1年生に比べて2年生のほうが高いスコアを示している。授業においては、2年生のほうが教師の指導に厳しさを感じたことがわかる。Q14「精神力の養成」、Q15「堂々頑張る習慣」は1、2年生共に高い数値を示している。これは、剣道が心身の鍛練を目指すものであるという印象が強く持たれているためであることを示している。Q18「深い感動」に関しては、1、2年生共に低い数値を示しており非好意的な態度である。授業における剣道の楽しさや心身の鍛練は理解していても、実際の身体活動で感動を覚えるまでには至っていないことを示している。

「授業に対する価値」の態度スコアを見ると、1、2年共に高いスコアを示している。「価値」は民主的な集団活動や生徒の主体性を示しており、主体性に関わるQ26が1、2年共に高いスコアを示していることから、主体的な活動が展開される際には民主的な学習集団ができていと推察される。Q25「永続的な仲間」、Q28「授業のねらい」については、2年生が高い数値を示しているのに対し、1年生の数値は低い。本校では、1年生より2年生のほうが剣道の授業のねらいがわかる傾向にあり、教師の存在価値を認めていることがわかる。Q21「チームワークの発展」については、1、2年共に低い数値を示しており非好意的な態度である。生徒にとって、剣道の授業は個人的なスポーツの印象が強く、競技としての協力性は発展しづらいと考えていと推察される。しかし、集団活動の喜びについて好意的な態度を示していることから、生徒は個人的なスポーツという特性を意識しながらも、授業においては仲間作りができると考えていることがわかる。高田(1981)や吉本(1986)は、良い授業の条件の一つとして、人間関係の円滑さという要因をあげているが、本校の生徒も、剣道の授業の中で友人と仲良く活動することを求めている傾向にある。

図1のクロス集計から、授業に深い感動を覚える生徒は、多くの生徒が同時に喜びを味わえたとらえていることがわかる。主体的な取り組みについて、生徒が自主的に活動することができるという意識が強いときは、生徒自身が授業によせる態度はかなり好意的なものとなることがわかる。また、主体的な活動を通してたくましい精神力を養えることを自覚している。意欲については、授業に意欲的に取り組むことによって頑張る習慣が付き、能力の有無にかかわらず誰もが意欲的に参加できると考えていることがわかる。授業を、友達を作る場として高く評価している生徒は、助け合いや協力の習慣がつくとこたえているが、チームプレイの発展については疑問視している傾向にある。

小林(1978)は、自主的・創造的な集団活動の展開が授業のよろこびと評価を連結する要因であると



しているが、本校の生徒においても、主体的な活動と集団活動のよろこびの数値が高い関連性を示している。米田ら(1986)は、小林の診断法を用いてバレーボールの2つの指導法を比較し、授業の成果を決定する要因は多様かつ複雑であるとしながらも、グループの協力的学習がうまく機能する条件が必要であることを示唆している。本校がとらえた4つの視点のなかで、生徒は「人間関係を円滑にすること」を期待していることがわかった。どのような教材であれ、生徒が強く求めているのは、いかにして人間関係の強まりと広がり形成していくかということであろう。

### ま と め

これまでの考察から以下のようにまとめることができる。

- 1) 剣道の授業に対する印象は、2年生のほうが厳しさを感じているが、学年差はほとんど見られない。
- 2) 剣道の授業では、集団活動の喜びを味わうことができると、活動に対する意欲が高まるといえる。
- 3) 生徒が自主的に活動できるときには、剣道の授業に対して好意的な態度を示しており、民主的な学習集団ができる。
- 4) 個人的なスポーツの印象が強い剣道であるが、生徒は剣道の授業でも仲間作りができると考えている。
- 5) 生徒は、チームワークの発展については非好意的であり、競技としての協力性は発展しづらいと考えている。また、剣道の授業では、感動を覚えることは少ないととらえていることがわかった。

### 引用・参考文献

- 恵土孝吉, 1989「正課剣道の手ほどき指導事例」『日本武道学会 第22回大会号』 p. 27
- 菊池博文, 野田昌宏, 梅野圭史, 後藤幸弘, 辻野 昭, 1987, 「中学校保健体育科における授業分析に関する研究」『日本体育学会 第38回大会号』 p. 427
- 小林 篤, 1978, 「体育の授業研究」(大修館) pp. 169-196
- 文部省, 1989, 「中学校指導書・保健体育編」 pp. 1-48
- 角 正武, 1987, 「剣道の学習指導 第1章」『全国教育系大学学部剣道連盟研究部会編・巽 申直』(不昧堂出版) pp. 10-15
- 鈴木義之, 1988, 「武道の特性をふまえた剣道指導の研究」『昭和63年度前期 茨城大学内地留学研修報告書』(未公刊)
- 田島東海男, 1989, 「正課剣道における意識の変化について」『日本武道学会 第22回大会号』 p. 25
- 高田典衛, 1981, 「体育授業の原点」(杏林書院) p. 164
- 高橋健夫, 鐘ヶ江淳一, 江原武一, 増田辰夫, 谷 敏光, 1985, 「生徒による授業評価の検討」『体育科教育』 pp. 60-65
- 高橋健夫, 広瀬裕司, 米田博行, 1986, 「バレーボールの研究・その1」『体育科教育』 pp. 72-79
- 吉本 均, 1986, 「現代教育の潮流と楽しい体育」『体育科教育』 pp. 10-13